

Ⅱ “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

2 “教育山形「さんさん」プラン”

を基盤とした授業改善のポイント

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

村山教育事務所

1 はじめに

村山管内の各学校では、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりが行われ、一人ひとりの確かな学力の育成を目指した授業改善が進められている。

本事務所では、教科のねらいを達成し、子どもが確かな学力を獲得するために、「学校教育指導の重点」や「授業改善チェックシート」を作成し、各研修会や計画指導訪問、要請訪問での指導・助言に活用してきた。「教科の本質に迫る単元・題材構想」「自ら学びを調整する振り返りの充実」「ICT活用等の柔軟性を備えた学びの環境整備」「指導と評価の一体化による指導方法の工夫・改善」の4つのポイントで授業改善を示すとともに、生徒指導の実践上の視点を授業の中で意識し、授業において発達支持的生徒指導を行う「学習指導と生徒指導の一体化」について助言することで、日常の授業の中で「学習指導と生徒指導の一体化」の重要性を意識し、よりよい人間関係の構築に努めることができるよう改善を図った。



2 村山管内における実践から

学習指導要領及び第7次山形県教育振興計画、“教育山形「さんさん」プラン”を踏まえた確かな学力の育成に向けて、学習指導等の課題の解決を図る実践的な研修会として教育事務所研修を実施し、教員の指導力の向上を目指した。

(1) 第1回学習指導力向上研修会の実施

『「主体的・対話的で深い学び」を改めて考える

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～（講義・演習）

各学校における授業づくり及び学力向上の取組みの中核を担う先生方を対象として、確かな学力の育成に向けた指導力向上を目的とする研修会を実施した。

中央教育審議会の動向や今後の教育課程の柔軟な編成を踏まえ、育成を目指す資質・能力の明確化と「主体的・対話的で深い学び」の具体化を図るとともに、それを授業づくりに生かすための研修を行った。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくうえでは、学習指導において教師が適切に指導性を発揮することが不

可欠であること、そして深く学ぶためには、振り返りの場面で、思いや考えを言語化することがポイントとなることを実感することができた。また、講師から「音で広げて、文字で刻む」というキーセンテンスをいただき、インプットとアウトプットのバランスを考えて、音声言語（話す）と文字言語（書く）をいかに有効かつ適切に使うかという視点から、授業を転換する必要性について示唆を得た。日々の授業を変えていくことを考える機会となった。

（２）第２回学習指導力向上研修会の実施

「全国学力・学習状況調査をもとに、

『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指す」（演習）

小・中学校等の教員を対象とし、各教科で求められている資質・能力を育成するための授業づくりへの理解を深めることをねらいとして研修会を実施した。

小学校国語、中学校国語、小学校算数、中学校数学、小学校理科、中学校理科の６部会に分かれ、全国学力・学習状況調査をもとに、県として課題のある問題を抽出し、資質・能力を育成するための具体的な方策について、対話を通して学びを深めた。また、教科別共有の時間を設けることで、教科の特質や小中の系統性にも目を向ける機会となった。

（３）第３回学習指導力向上研修会（学校経営指導訪問支援型の一環）

「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて」

～『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実について再考する～

本研修会では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく学校の主体的な研究の取組みを公開し、村山管内の小・中学校へ学びを広める場とした。実践的に取り組んでいる「協働的学習」と「単元内自由進度学習」の授業を公開し、子どもの主体的に学習に取り組む力を引き出したり、深めたりするための教師の指導や支援について学びを深めた。支援型の中学校の先生方からは、「支援型を行ったことで、方向性を揃えながら、スピード感をもって、前向きに校内研究に取り組むことができ、学校全体の士気が上がった。」「板書や授業準備の仕方、授業をする上での心構えなど、指導主事の伴走により、先生方が授業をブラッシュアップし、日常の授業に反映させる「教師の学びの姿」が見られるようになった。」「職員室で先生方の授業の話題が増えた。」などの感想があった。

子どもの思考や学び方の深い理解に基づいた、教科の本質を捉えた教材研究を重ねることこそが、自立した学習者を育成する上で不可欠であることを再認識する機会となった。研修を実施するにあたっては、継続的に学校の研究に関わることで、先生方とともに学びを深める好機となった。また、対話型研修会では、生徒と講師、研修者同士の対話を通して、それぞれの立場から「よき学び手とは」というテーマで話し合い、これからの授業づくりについて考えを共有することができた。これからも先生方の授業づくりに寄り添いながら、伴走者として学校の研究を支援していく。

3 おわりに

「各学校で育成を目指す資質・能力」を明確にし、全教職員の共通理解のもと、日常的に授業改善に取り組んでいる学校が増えている。各教科等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりについて周知していくことを通して、一人ひとりの子どもを主語にする教育活動を推進し、本プランの目指す「わかる授業」「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現を目指していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

最上教育事務所

1 はじめに

本地区では、以前から協働的な学びに視点を置いた授業づくりに取り組む学校が多く、主体的・対話的で深い学びが推進されている。“教育山形「さんさん」プラン”による少人数教育の利点を生かし、一人ひとりの考えを大切にしながら、ペア学習やグループ学習における対話を通して、児童生徒主体の深い学びを目指す授業づくりが進められている。

また、最上教育事務所としては、教師のキャリア形成と教育の質の向上を目的とした「確かな学力育成支援『最上ティーチャーエレベートプロジェクト』」や、「学習指導力向上研修会」、「授業改善へのアクション」等を通じて、各学校における授業づくりへの伴走型支援を進めている。

2 最上管内の実践から

(1) 最上ティーチャーエレベートプロジェクト（通称：M-TEP）

最上地区では、児童生徒数の減少が著しく進んでおり、いずれの市町村においても学校規模の小規模化が進行している。また、若手教員の急増に伴い、校内OJTにおける若手教員の育成が課題となっている。そこで、以下の三つの支援を実施した。

支援区分	対象・規模	主な支援内容	ねらい
A：若手育成型	7校・延べ28名	若手教員を対象とした授業づくり支援	若手教員の基礎的指導力の育成
B：学校支援型	3校	授業参観による指導・助言、授業づくり、指導案検討	学校全体の授業改善
C：チーム研修型	3～4名／1グループ	単元計画案から評価までの協働的授業づくり	学習指導力の向上、単元構想力の育成

校内研究では、本時の授業が中心となることが多いが、本研修では、習得・活用・探究のバランスを意識した単元づくりを軸に検討を重ね、教員の学習指導力の向上を目指した。普段は、複数の教員が一つの単元について、じっくりと協議したり、授業について語り合ったりする機会が限られていることから、参加者からは「大変有意義な研修であった」との評価が寄せられている。

また、C：チーム研修型については、小学校算数部会および中学校数学部会の2つの部会を設置し、3回の研修と授業実践を通じた研修を実施した。

部会	授業実践	単元名	助言者
小学校算数	新庄市立日新小学校 第6学年 算数	「順序良く整理して調べよう」	山形大学教職大学院 准教授 森田智幸氏
中学校数学	新庄市立日新中学校 第3学年 数学	「相似な図形」	県教育センター 指導主事 芳賀司氏

参加したメンバーからは、「1つの授業について、チームで単元計画をつくることで、これまではない視点を取り入れ、生徒を引き付ける魅力的な課題づくりができた。他校の先生方と情報共有したり、他校の生徒の様子を参観できたりしたことは、貴重な経験となった」との感想があり、実践を通じて成果を感じている様子を伺うことができた。

また、授業研究会の参加者からも、講師の先生の講話内容も含め、今後の授業改善につながる研修になったとの評価を受けた。

(2) 学習指導力向上研修会

全国学力・学習状況調査の結果を授業改善に生かすことを目的に、学習指導力向上研修会を開催している。研修会では、各学校の研究主任を中心に参加いただいた。また、研修会では、山形大学教職大学院教授の野口徹氏を講師に迎え、「全国学調の問題から授業づくりを考える」をテーマに、講義と演習を行っていただいた。

- ・「国語」と「総合的な学習の時間」の学習内容が、**児童生徒にとって必然性のあるリンク**として感じられ、学習している内容が「**自分だったら〇〇と考える**」といった思考によって活性化する授業がもっと必要である。
- ・算数・数学では、既習の学習や生活経験をもとに「**見通し**」を立て、「**言語化(つぶやいたり、ノートに記述したり)**」することを通して、問題解決を行う。
- ・自らの学びを**自覚(モニター)**して自分で動かしていく⇒**自律した学習**

講義・演習を通じて上記の指導と助言をいただいた。先生方からは、「どのような取り組みが改善につながるのか具体的に見えた」「学び方の見通しをもつということが印象的だったので、明日からの実践に生かしたい」等の好意的な感想が多かった。

(3) 授業改善へのアクション

地区全体の全国学力・学習状況調査の結果を分析し、授業改善に向けて地区全体で共通に取り組むべきポイントを3点示した(下図参照)。

授業改善へのアクションについては、参加した研究主任の先生方が、学校で全教職員に伝達するようにしている。また、学校訪問等の全体指導や授業後の協議の場などで、事務所の指導主事が授業改善へのアクションの視点を踏まえた指導助言を行っている。各校において、どの視点を重視していくか明確にするようお願いをし、組織で取り組む授業改善に活用いただいている。

R 7 授業改善へのアクション(地区としての取り組み)

教科の本質を捉えた**基礎的・基本的な知識・技能の「定着」**を目指した授業づくりの日常実践

- ①学習活動を通して、身に付けさせたい**知識・技能を繰り返し活用し**、定着を図る。
- ②教科等の「**見方・考え方**」を働かせ、個の学びを保障しながら協働的な学びにおける対話の質を高める学習活動を仕組む。
- ③振り返りを通して**学びを自覚し**、授業とのつながりを意識した家庭学習につなげる。

教科におけるつけたい資質・能力を明確にした**適切な評価の実施**

- ①教科におけるつけたい資質・能力を明確にした単元を構成する。
- ②具体的な評価規準を作成し、児童生徒と共有する。
- ③評価問題・活動を必ず実施し、児童生徒の学習改善・教師の指導改善に生かす。

児童生徒の実態を把握し、**校内研究のレベルアップ**につなげる

- ①日々の授業及び学力調査から、**誤答やつまずきを分析し**、授業改善に生かす。
- ②定期的にアクションプランの見直し・校内での共有を行い、C(チェック)A(アクション)の充実を図る。
- ③発達段階に応じた、**計画的かつ必然性のあるICT活用**を推進する。

3 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、「さんさん」プランを活用し、指導と評価の一体的な推進が重要である。授業改善を通じたよりよい授業づくりに向けて、今後も先生方を支援していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント FUN TO THINK♪ FUN TO TRY!

置賜教育事務所

1 はじめに

学校教育の指針「おきたまの教育」は、学習指導、生徒指導、特別支援教育を一体的に捉え、目指したい学校の姿を示している。最上位目標には、誰かがつくってくれるのを待つのではなく、自分が当事者として、延いては子どもも大人もチームとなり、誰一人取り残さずに「ともに学び合える喜びを感じるような一日、一日」を実現していきたいという思いが込められている。

“教育山形「さんさん」プラン”による、子どもも大人も自分らしく可能性にチャレンジできる環境を下支えとして、置賜の先生方とともに積み重ねてきたことを紹介したい。



2 置賜管内の実践

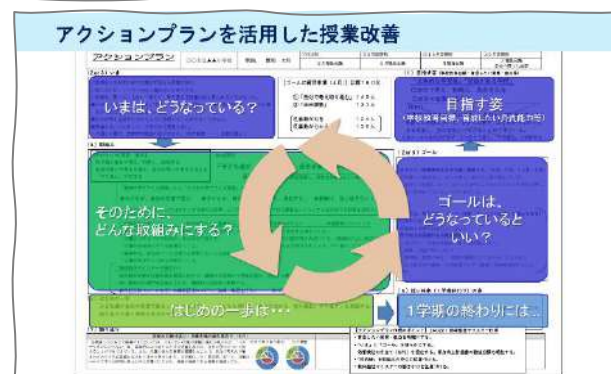
(1) 8市町とともに ~指導の方向性をそろえる~

第1回管内指導主事会議において、8市町教育委員会指導主事と指針を共有している。市町の指導主事とベクトルをそろえて、管内小中学校の指導・助言にあたり、メッセージを伝えられていることは、置賜の強みといえる。

また、「~しなければならない」という印象を与えるチェックリスト形式ではなく、学校の実態に合わせた余白を設けつつ、目指したい姿を共有することを大切にしている。

全国学調の結果を受けて、9月は指導の方向性を右記のように示した。

また、学校研究を日々の授業改善につなげることで、PDCAサイクルを回すことを意識した置賜版アクションプランも浸透してきている。



(2) 「今、求められる教育」の解像度を上げる

① 7月7日「学びの未来共創研修会」

文部科学省初等中等教育局教育課程課長の武藤久慶氏を招聘し、「なぜ令和の教育改革なのか」についてご講義いただいた。次期学習指導要領も見据えたこれからの学びについて考える機会となった。



② 10月27日「資質・能力向上研究協議会」

東京学芸大学教職大学院教授の堀田龍也氏を招聘し、教科担任マイスター事業重点校の授業を参観いただいた。そのうえで、より具体的な授業改善のポイントをご示唆いただいた。

③ 2月4日「誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト（誰P）」研修会

誰Pパイロット校および教科担任マイスター重点校の授業実践を管内 53 校の先生方と共有した。校内研の在り方や、ICTを効果的に活用した授業実践について、実践者である先生方に語ってもらうパネルディスカッションを行った。

(3) 「共創」をめざして ～伴走型支援による授業改善の推進～

① 誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト

今年度から、パイロット校2校（小中1校ずつ）へ1年間伴走型支援をする事業を始めた。学校の要望に応じて、年間8回訪問する。パイロット校は、理念「すべての子どもに自ら学びをつくっていきける姿」の実現を目指し、事務所の指導主事と協働して校内研究を推進してきた。



校内研修会で、指導主事も一緒に協議に参加する。



普段の授業を教職員と指導主事が参観。その後、事前研を行う。子どもの姿で、授業の構想についてともに語る。

② トライ訪問

教育事務所の指導主事が、継続的に、個人ベースで伴走型支援を行っている。若手育成事業として学校からの期待も大きい。研究授業の授業構想相談や、研究主任や生徒指導担当からの相談等、支援の幅が年々広がっている。

3 おわりに

「さんさん」プランにより実現している教育環境を授業改善につなげるための研修設計や伴走型支援について、来年度も戦略の中に位置づけ充実させていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

庄内教育事務所

1 はじめに

庄内教育事務所管内では、各学校において児童生徒の確かな学力の育成を目指し、“教育山形「さんさん」プラン”を生かした、きめ細かな指導を基盤とする授業づくりに取り組んでいる。

各学校への指導・支援の際には、庄内指導主事会で作成している「授業づくりワンペーパー」を活用し、目指す方向を共有しながら授業改善を進めている。また、「学校教育指導の重点 各教科等の指導の重点」を活用し、確かな学力の育成に向け、学習指導要領で求められている「教科として付けたい力」につながる授業づくりについて指導・助言を行ってきた。また、「授業づくりワンペーパー」や「各教科等指導の重点」などの資料は現物を持参し、内容の説明や紹介を行うことで、先生方がその場で内容を確認できるようにした。

2 庄内管内における実践から

(1) 学習指導力・特別支援教育力向上に向けた学校サポート訪問の実施

学力向上支援チームによる学校訪問事業終了に伴い、「児童生徒の確かな学力の育成」に向けて令和6年度より学校サポート訪問を実施している。今年度は事前検討会への訪問も可能とし、学校のニーズに合わせて事務所指導主事が訪問し、授業づくりについて一緒に検討したり、確かな学力の育成につながる授業づくりのよさを価値付けたり、国や県の方向性を踏まえて指導・助言を行ったりしてきた。学校からは「事前研と提案授業をセットで指導をしていただくことで、より子どもたちの実態や授業者の思いに寄り添った授業につながり、有意義な時間となった」「以前は本時や導入に重きを置いて単元計画を立てていたところがあったが、訪問を通して単元全体の構想を広く考えるようになったり、ゴールで何をを目指すのかを自分自身で整理したりできるようになった」などの感想が挙げられ、各学校の学力向上PDCAサイクルの推進につなげることができた。

(2) 「学校研究ワンアップ研修会」の実施

令和3年度より、学校研究ワンアップ研修会と学力向上研究協議会を分けて開催している。本研修会は、主に管内の研究主任を対象とし、学力向上の推進に向けて学校研究および授業改善推進の中核となる校内リーダーの育成を目的としている。

第1回研修会では、事務所指導主事が「教科で目指す資質・能力」について説明し、学校研究の目的について確認を行った。また、研究主任経験年数が2年以下の若手の研究主任が増えていることを踏まえ、第1回研修会を年度初めに設定し、学校間のネットワークづくりにもつながるように配慮した。

【参加者の振り返りより】

他校との情報収集を行うことができ、交流しながら研究を進めることができそうである。つながる場ができたことが大変ありがたい。



第2回研修会では、NPO法人エデュ・ネットワーク・プランの代表理事の齊藤一弥氏を講師に迎え、「教科の本質を捉えた授業づくり」をテーマに講話をいただいた。齊藤先生からは、次期学習指導要領の方向性を踏まえ、「教科として付きたい力を明確にし、概念形成につながる授業づくりに取り組むこと」や「子どもたちの有能さを引き出す教師の伴走支援を意識すること」など、今後の授業改善や学校研究を進めるうえで重要となる視点について示唆をいただき、参加者が改めて考える機会となった。

【参加者の振り返りより】
 子どもの自走を支える伴走者として、本質を捉えた授業を行い、子どもが「できた」「分かった」「楽しい」と感じられる授業を積み重ねていきたい。

第3回研修会では、「庄内地区における全国学調の結果から見えること」をテーマに講義・グループ協議を行った。協議では、今年度の結果を踏まえ、確かな学力の育成に向けた授業改善への次の一手について話し合った。「教科として付きたい資質・能力を明確にし、それらを活用する場の設定を工夫することで指導事項を確実に身に付けさせていくこと」や「単元のゴールを児童生徒と共有し、児童生徒自身が学習の成果を自覚できるようにすること」など、今後大切にすべき点を共有することができた。

(3) 「学力向上研究協議会」の実施

学力向上研究協議会では、管理職及び教務主任を対象として、「学校組織からの学力向上」という視点からのメッセージを伝えることができた。

前半では、県教育局教育政策課の菅谷内教企画調整専門員より「第7次山形県教育振興計画について～学力向上に関連して～」をテーマで講義をいただいた。後半では、事務所から全国学力・学習状況調査における県及び庄内管内の結果や分析について説明し、各学校において授業改善に生かすことができるようにした。



(4) 事務所からの発信の工夫

「確かな学力の育成」に向けては、前述の学校訪問や研修会で伝えるとともに、指導課通信を通して各学校へ必要なメッセージを伝えた。

第106号(右図)では、学調の結果を踏まえ、改めてどのような力の育成や授業づくりが求められているのか、確認したいことを記載した。

今年度は、表現やレイアウトにも工夫を加え、伝えたい内容が一目で分かるようにした。

3 おわりに

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して、確かな学力の育成を目指していくために、組織的かつ計画的な教育活動が実施されるよう、今後も学校訪問や各種研修会での指導・支援を続け、本プランのねらいである「わかる授業、楽しい学校」につなげていきたい。